

駿河ほねほね団活動報告

佐々木彰央・高山達子・江田慶紀



駿河ほねほね団活動の様子



除肉作業の様子

佐々木彰央

現在の駿河ほねほね団には 30 名の団員があり、6 月 24 日に 14 名、7 月 22 日に 17 名、8 月 19 日に 8 名で活動を行いました。3 回の活動はいずれもイノシシの解体で、作業は今も続いています。このイノシシは体重 70kg ほどのオスで、骨格標本完成後に黄ばみの原因となる脂が多く、3 カ月間水に浸けていますが、毎日脂が浮いてきます。

高山達子

みんながイノシシを解剖している横で何故か、ナイルモニターの解剖をすることに。爬虫類独特の匂いがかかなりきついが、何年か前に解剖した腐ったナイルモニターに比べれば、まだまだと変な慰め方をしながら格闘する。頭骨に取り掛かると、肉が全くないのか、全然皮がはがれない。こんなに頭骨に苦労するとは思わず、かなり時間をとられてしまう。その後、今度は尻尾が延々、長くて終わらない。そのうえ段々細くなって、頭骨と同じように、皮がはがれなくなる。いくら時間をかけても、終わりそうになく泣きたくなってきた所で、今回もタイムアウト。まだまだ肋骨周りも肉が多く残っていて、来月も引き続きナイルモニターと格闘することになりそうです。

江田慶紀

骨格標本作成時の除肉は作業的に行うわけではなく、遺体の体内にある骨を掘り出していく彫



イノシシの解体・除肉作業の様子

刻のような感覚で、骨格の形状やそこにつく筋肉の仕組みについて知るほどに面白いです。私が活動して間もない頃は、徐肉する際の薬品の匂いに慣れずに鼻水と涙が止まらなくなって鼻にティッシュを詰めながら除肉をしたり、着けていた使い捨てのゴム手袋にメスを刺してしまい指から血が出てしまう事が多々ありました。

活動を通して、砂漠に生息するケヅメリクガメの骨格標本作成した際は、皮膚が鎧のように硬くメスがなかなか通らずに苦労しました。また、甲羅の隙間から肩甲骨や骨盤を取りだし、徐肉と脱脂した後で再び甲羅に戻し組み立て接着させたのですが、まるでボトルシップを作成しているような感覚で夢中になり作成し、すぐに時間が過ぎてしまったのを覚えています。常に緊張感のある時間ですが、完成し組み立てると大変に達成感があります。